

寒川町立旭が丘中学校

研究テーマ：共生的な学校環境の実現 ～肯定的、積極的な支援・指導の充実～

1 実践の目的

昨年度より設定した研究テーマを継承し、引き続き「自己肯定感を高める支援のあり方」について研究を深める。昨年度の研究では特別活動でのポジティブ行動支援（以下、PBS）の実践を通して「応用行動分析学（ABA）」の基本理念を獲得することができたため、PBSの手法を用いて肯定的、積極的な支援・指導のさらなる充実を図る。昨年度末の研究会にて講師より「キャリア教育」の重要性について助言を受けたため、研究の重点として「総合的な学習の時間」を設定する。たくましく未来を生きる生徒たちを育成するためには、生涯にわたる学びの基盤となる資質・能力を発揮できるようにしていくことが重要となる。生徒一人一人が社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながらよりよい社会と幸福な人生を切り拓いていく力を育むことが求められている。研究として特に「生きる力」の育成を重視し、※キャリア発達を促すことで生涯にわたって学び続ける意欲の向上を図る。

※キャリア発達

社会の中で自分の役割を果たしながら、
自分らしい生き方を実現していく過程

【中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」より

2 実践の内容

A 総合的な学習の時間における

ポジティブ行動支援（PBS）

総合的な学習の時間で重視されている「探究的な学習」を積極的に取り入れ、主体的・協同的な学びへと繋がる学習環境を構築する。事前に生徒の発達や興味・関心を適切に把握することに留意し、生徒自らが課題意識をもち、その意識が連続発展するように促していく。その手段としてPBSを用い、生徒自身が自らの行動を評価・改善できるように支援する。そこで、昨年度に各教員が作成・実施してきた「行動支援計画シート」の枠組みを活用して、生徒が自らの行動についてABCフレームをもとに望ましい行動をとれるように支援する。可能な限り小集団・個人を対象とした研究を推進し、生徒の特性に合わせて個別最適化された支援・指導の充実を図る。

B 教育活動全般への

ポジティブ行動支援（PBS）の拡充

総合的な学習の時間で育まれた「生きる力」を学校教育の現場で発展・拡充させ、より多くの場面でPBSの理論を用いた取組を推進させていく。ここでは大きな制約をかけることはせず、各教科・特別活動などにも派生させることによって共生的な学校環境を実現させる。特に日々の学級活動や、合唱祭などの学校行事に適した手法であることから、肯定的・積極的な支援・指導の充実を図る。

3 実践の成果と課題

本年度は、全5回の研究会・講演会を開催した。年度を通して同一の講師を招聘し、本校の教育実践について一貫した指導を仰ぐことにより、「知識の習得」「実践」「フィードバック」の流れを実感を伴って理解でき、各教員が意欲的に研究へ取り組むことができた。また、研究会では意図的に教員同士のグループワークを取り入れることにより、新たな気づきや学びを得ることができた。研究会・講演会に対する教員の評価も高く、研究を深める契機となった。

PBSの手法を用いて生徒自身が自らの行動を評価・改善できるように支援し、課題解決の意識を連続発達するように促すことができたのは大きな成果である。1学期には生徒へのアンケートを実施し、生徒の課題意識に沿った行動変容をクラス単位で促した。その経験を踏まえ、11月の研究授業では生徒個人が「行動支援計画シート」を作成するという実践を試みることができた。アンケート項目の「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」では、年間を通して約95%が「そう思う」であり、大きな変化はなかったが、これはPBSを含めた学校の取組を続けてきた結果ともいえるため、今後も継続していきたい。

「キャリア教育」の目的は、社会的・職業的自立に向けて、必要な基盤となる能力や態度を育てることにあり、「個」の行動に焦点を当てた今回の取組はキャリア教育の視点でも有効であったと考える。

本年度の研究は「共生的な学校環境の実現」を目指して、昨年度から引き続きPBSの指導手法を取り入れた研究を進めた。総合的な学習の時間におけるPBSは生徒の「キャリア発達」に繋がり、生涯にわたって学び続ける意欲の向上を図ることができた。

また、教員同士が実践を協議・共有することにより、実践的な指導力の向上へと繋がる研究となった。

4 今後の展開

研究テーマを継承し、「自己肯定感を高める支援のあり方」について研究を深めていきたい。これまで「特別活動」(令和6年度)、「総合的な学習の時間」(令和7年度)に焦点を当てて研究を進めてきたが、来年度は「教科指導」を中心に研究を深めていく。教科指導は各教科の専門教諭が体系的な資質・能力を育成する中心的な教育活動であり、学校教育法及び学習指導要領に基づく教育活動の柱となる営みである。生徒の「生きる力」を育み、変化の激しい社会をたくましく生き抜くための3つの能力(知・徳・体)の調和を図るためにも、その重要性は極めて高い。

今年度まで研究を重ねてきたPBSの手法を系統的に教科指導に組み込み、生徒が主体的に学ぶ(B:標的行動)ために必要となるきっかけ(A:先行事象)とフィードバック(C:結果事象)に関して様々な視点から考察を深めていく。具体的には教授側のフレームワークとして、ARCSモデル(Teller,1983)を取り入れた授業展開を基本とする。また、OTR(Opportunities to Respond)「全員に対する活動を伴う指示」やBSP(Behavior Specific Praise)「具体的な行動に対するポジティブフィードバック」の手法について探求し、学習者の学習意欲を高めることで学業成績の向上を図る。生徒の内発的動機づけを促し、課題遂行量を高めることで学力の向上を目指す。学習において課題解決の達成率を高めることを自己高揚動機とし、多くの成功体験を積む過程で生徒の自己肯定感を高める指導・支援を展開していきたい。